

自由課題 (教師1日体験) レポート用紙 提出 令和6年2月19日
(A) 高等学校 氏名 (Bさん)

※4人の先生にインタビューをさせていただいたため、分量がかなり多くなってしまいました、
よろしくお願いたします。

※以下、担任の先生・学年主任の先生へのインタビューより作成しました。

「1日の動きについて」

勤務時間は7時40分から16時50分。部活動があれば帰りは18時30分から19時ごろになる。

・ 朝

(担任の先生)

まず、classiというアプリや電話での欠席連絡を確認し、わかっているものは出席簿に記入する。次に、ネット上にある先生用の掲示板を確認し、SHRで連絡しなければならないことを把握する。そして、全体の職員朝会が始まり、掲示板になかった連絡事項、全体の1日の動きなどを確認する。次に、学年ごとの打ち合わせがあり、そこで学年の1日の動きを確認する。そして、レターボックスから配布物を取り出し、教室に向かう。その後、シヨートホームルームで改めて出席状況を確認したり、配布物を配ったりしながら、生徒一人一人の顔色や様子も一緒に確認する。また、掲示板や職員朝会、学年での打ち合わせで確認した連絡事項を生徒に伝え、提出物などを回収する。そして、生徒が1限の準備ができるようになるべく早く終わらせる。

・ 空き時間

(担任の先生) ・ (学年主任の先生)

まず、空き時間などを活用して、授業準備や様々な事務的な仕事を行う。授業の内容を考えるだけでなく、体育教師であれば、グラウンドのライン引きなどがあり、三年生の担当で受験期になれば、生徒の進路や出願先の決定などについてを、生徒がいなくても進める。また、部活動を持っていたら、部活動のスケジュール調整や大会への申し込みなどの仕事もしなくてはいけない。

・ 清掃

(学年主任の先生)

掃除は、その人の人となりがよく見えるのではないだろうか。学校の清掃なら尚更である。学校の清掃は自分のためであることは間違いないが、人のためでもあるからだ。清掃を通して、何事においても、自分のため、人のためと考えられる人になってほしい。「なんでこんなことしなくちゃいけないんだ」と考えてしまう人は、世の中に出て得することは何もないだろう。だから学校の清掃を一所懸命できる人になってほしい。そのために、最初は自分も一緒に清掃し、できるようになってきたら、生徒たちだけに任せるようにしている。

・ 部活動

(担任の先生) バレーボール部 主顧問 ・ (学年主任の先生) 剣道部 副顧問

専門の種目がなければ様々な種目を担当することになる。学び続ける姿勢が必要になってくる。卓球の顧問になった時には、本屋に行き、卓球の本を買い、卓球について研究を始めた。こんな風に、

様々な種目の研究を長年していると、それぞれの種目で共通することがある。そのようなことを生徒に伝え、効果があると、教師としてとても達成感を感じる。また、生徒は正直なので、先生が一生懸命やっていると、生徒も頑張る。しかし、先生が怠けていると、生徒も怠けてしまうのである。そのため、自然と生徒の前に立つ時には準備をしないではいけないという気持ちになる。

そして、部活動をしていて、やりがいを感じる瞬間は、指導中に目標に向けて生徒と努力をし、達成した時や教え子が卒業後に会いに来てくれた時、卒業後、同じ種目を続けてくれた時である。

「授業について」

(担任の先生) 体育

授業中は怪我を防ぐことがいちばん大切である。怪我を防止するために、授業中は全体が視野に入る位置に立つようにしている。また、落ち着きのない人がいたら、少し厳しい言葉も必要になってくるだろう。しかし、命には代えられない。ダメなものはダメだと言わなければならない。また体育という授業としては、筋力の向上、運動量の増加を目指し、各種目の技術やマナーをきちんと教えることも大切である。

(学年主任の先生) 数学

授業をする上では、わからない人を少なくしたいという思いが一番大きい。また今、IT化が進み、多くの授業でプロジェクターなどが用いられている。プロジェクターを使うことは、教科書を映し出すなどやはり使いやすい面もあるが、次の話に行くためには、今の内容を切り替えて消さなくてはいけないという特徴がある。そのため、紙を用いて黒板などに貼り、授業中はなるべく残していられるようにしている。そうすることでいつでもすぐに、公式や問題を解くポイントを確認することができるようにしている。

「教師1日体験を終えての感想」

私は、お二人の先生から話を聞き、先生方の空き時間はかなり忙しい時間だと感じた。授業準備や研究、役職ごとの事務的な仕事、時期ごとに始まる仕事、部活動の事務的な仕事といったように大半が事務仕事である。私自身、先生とは子供たちに教えること、接することが一番の仕事だと考えていた。しかし、お二人の先生方から話を聞いたことで、先生方は私たち生徒が見ていないところで膨大な量の仕事をしていることに改めて気付かされた。その事務仕事があるから私たちは学校に来て授業を受けられているといっても過言ではないと思う。

またそれぞれの先生が自分なりのやり方で生徒たちと向き合い、生徒たちのために自分の時間を削ってまで仕事しているということがわかり、改めて感謝の気持ちを伝えたいと感じている。また、教師を目指す身として、誰かのためにといい気持ちで忘れずに、大学生活を送っていきたい。

* 以下、SCの先生・養護教諭の先生へのインタビューより作成しました。

「不登校の生徒への対応」

(SCの先生)

不登校の生徒はほとんど学校に来ていないため、最初から生徒本人と話すことはとても難しい。そのため、SCの存在を知った生徒の保護者が相談に来るといったケースが多々ある。保護者と面談することで、保護者を通して生徒本人がSCの存在を知ることができる。そして、生徒がSCと話してみ

たいと思えば、初めて生徒と直接対話することが可能になる。また、不登校の原因は先生も保護者もわからないことがある。しかし、SCは学校外、家庭外の他人であり、自分のことを評価したりしないわけだからと、学校に来れなくなった理由を話してくれる生徒もいる。そして悩みがすぐに解決できそうなものなら先生方などと共に解決に励む。もしくは医療機関へつなげたり、転校などを勧めたりなどをする。

(養護教諭の先生)

教室復帰するためには、スモールステップを踏むことが大切である。まずは保健室登校をして、とにかく学校に来ることを目標にする。その後、慣れてきたら1時間、2時間、午前中と教室に行ける時間を増やしていくのである。しかし、思い描いてるようにスムーズにはいかず、また休み始めてしまうこともよくある。長い目で見守ることが重要である。もし、本人の意思で、転校したいと相談があれば、「こういうところもあるよ」と教えることもある。その場合には決して押し付けず、複数の選択肢を紹介するのみである。やはり、一回挫折経験があると、とても深い傷が残り、次は失敗したくないという思いもあるだろう。その思いを汲み取れるようにサポートする必要がある。

「現代の不登校の理由のひとつ、無気力について」

(SCの先生)

子どもたちにどうしてやる気が湧いてこないのか、といった問いを投げかけると、「これからの世の中、これからの社会に希望が持てない」、「周りにいる大人が楽しそうでない」というような答えが返ってくる。すなわち、無気力の原因は周りの大人たちにあるのだ。つまり、現代の不登校の原因は子どもたち自身にあるのではなく、周りの大人たちにあるのかもしれない。そのため私たちは、子どもたちに、さまざまな素晴らしい大人達もいるのだということを伝えなくてはならないと考えている。実際に自分自身の友達で楽しく仕事をして成功した人の話をしたこともある。また、自分自身も仕事を楽しみ、子どもたちに希望を持たせられるような存在になることが必要だと考える。大人は考え方をアップデートしていかななくてははいけない。

「生徒と対話する上で気をつけていること」

(SCの先生)

まず、生徒が悩みに対してどうしたいのかを一番に優先する。例えばいじめの場合、生徒がいじめの当事者には何も言わないでほしいというのなら、その通りにする。注意して欲しいと言うならそれもまたその通りにする。生徒の気持ちを一番に尊重することが大切である。また、生徒に決して自分の価値観を押し付けてはならない。今でも、「生徒は学校に来て当たり前、来なくてははいけない」というような、生徒はこうあるべきだという考え方があるが、そう考えるのは少し間違っているのではないだろうか。生徒1人1人の考え方がある。つまり、その子にとっての正解がある。それは決して否定してはならないものである。生徒の答えを受け止め、そういう考えもあるんだなと解釈することが大切である。

また、生徒が先生と養護教諭、SCなど複数の人に悩みを打ち明け、相談している場合、それぞれに対する話が違うことがある。そうすると普通、「どれが本当なんだ？」となってしまう人が多いだろう。しかし、どの話もその生徒の本心なのである。いろんな顔があるということだ。そのため、生徒を1つの枠にはめようとしてははいけない。

(養護教諭の先生)

モヤモヤを言葉にして出すだけでスッキリすることもあるので、解決が全てだと思わずに、その子
の話をじっくりと聞き、問題点を整理するお手伝いをするようにしている。また、絶対にその子の中
で輝く何かはあると思うので、それを見つけて褒めるということを大事にしている。そして、保健室
に来るのだから何らかのニーズがあったわけだが、養護教諭と話すことによって、保健室を出ていく
ときは来た時よりも元気になってほしいと考える

日常的に話を聞く場面というのは大体、体調不良を訴えた上で話をしていくと、悩みを吐き出して
くれる場面が多い。また、小学生はまだうまく言葉では訴えられない子が多いのでどうしても最初は
身体的な症状を訴えてくるのがほとんどである。実際、小学生は身体症状に現れやすい。その身体
症状から子供たちの悩みを紐解いていくことが必要である。

「どんな考え、能力を持つ先生が必要だと思うか」

(SCの先生)

まずは、常に実践者であってほしい。いつも子どもたちのことを考えて、「どんどん悩みを解決し
ていくぞ!」という姿をいつも子どもたちに見せてほしい。しかし、子どもたちにいい所ばかり見せ
るのはよくない。完璧な人に対して、近寄り難いと思う子どもたちは多いのではないだろうか。その
ため、失敗している姿や苦戦している姿なども曝け出していき、生徒に親近感を持ってもらえるよう
にすることが大切である。

次に大切なことは、一貫性である。子どもたちに対して、前はこう言っていたのに、今日はこう言
っているというようなことを言ってしまうと、子どもたちを混乱させてしまう。一貫性を持って生徒
たちと対話しなくてははいけません。

また、生徒と向き合っていく中で1人きりで向き合ってはならない。必ず、他の先生方や、SCなど
他者と連携して、解決に向け努力するべきである。決して1人で抱え込んではいない。誰にも相談
せずに1人で生徒に向き合っている先生よりも、他者に頼りながら子どもたちのために努力している
人の方が魅力的なのではないかと思う。

(養護教諭の先生)

保健室にどんどん顔を出せる先生になってほしい。小学校の先生は生徒の様子を見に、よく保健室
にくるが、高校だと距離感があつたりして保健室に来る先生は少ない。しかし、子どもにとってみれば
「こんなに心配してくれてる先生がいるんだ」と考えることができ、学校に戻るきっかけになるこ
ともある。また、保健室に来て養護教諭と話すことによって、生徒のことについて情報共有ができた
り、養護教諭も先生から普段の元気な生徒の姿を聞くことができる。

「大学で心理学を学ぶにあたって」

(SCの先生)

心理学に限ることではなく、学問を学ぶ上で心がけてほしいことがある。それは、学んだ学問の知
識を自分なりの解釈で、どう生かすかを常に考えながら学ぶということだ。誰かと対話する中で、学
んだ学問を用いたいと思っても、知識を持っているだけでは使いこなすことができない。自分の言葉
で対話しなくてはならない。

また、様々な考えに出会うと思うが、その時その時で、「こういう考えもあるのか」、「自分だったらどう考えるだろうか」というように柔軟性を持った考え方をしてほしい。

「教師1日体験を終えての感想」

(SCの先生)

私は、SCの先生から話を聞くことができ、これから大学で学んでいく上で意識しなければならないことや、実践の時に役立つ知識を得ることができた。特に「1人で生徒と向き合ってはならない」という話を聞き、私はとても考えさせられた。中学生の時から私は、担任の先生などから「Bさんは抱え込みやすい性格だから」と常に言われ、心配されていた。だから何か悩みがあれば、抱え込まず、友達や先生に話すようにしていた。しかし、やはりまだ耐えられると思い、抱え込んでしまうことが多々あったのも確かである。そんな私は、生徒と向き合った時、自分のせいだと決めつけ、1人で抱え込んでしまうかもしれない。しかし、SCの先生の話を読み、自分が気をつけなければならないことを再認識できたことで、大学の授業などの実践の場で1人で抱え込まずに、子どもたちと関わり、何かあったら他の仲間などと、連携して問題の解決に取り組めると思う。子どもに限らず、人と関わる上で、相手の心も自分の心も1人にしてはいけないと気がついた。

SCの先生から聞いたことをこれからの大学生活で大いに活用していきたいと考える。実践の場だけでなく日常生活から活用して、体に染みつけていかなければいけないと感じた。

(養護教諭の先生)

将来、私が小学校に勤務することになったら児童一人一人と向き合うことを大切にして、全体の調和ばかりを気にするのではなく、いかに児童一人一人が充実した学校生活を送れているかを大切にしたい。そのためには、他の先生との情報共有を大切に、子どもたちの心身の状況を素早く把握し、「あなたのことを気にかけている」ということを何気なく伝えられるようにしたい。また、もし不登校の児童が出てきても養護教諭の先生が言っていたように、子どもの心身の状況に合わせた段階を踏んで、成長のサポートをしたい。スモールステップの中では児童が自信を無くすことがないように、児童の輝くところを見つけ、児童にどんどん伝えたいと考えている。

養護教諭の先生は様々な生徒と関わってきたのだと思う。そんな先生から話を聞いたのはとても貴重だった。聞いた話を自分の中で噛み砕き、解釈して活用していきたいと考えている。

(卒業直前の4年生のコメント)

教師1日体験のレポートを読ませて頂き、今一度自分も初心に戻ることができました。ありがとうございました。大学では、様々な理論を学びますが、それはあくまで理論であり、実際その通りにやってみても上手くゆかないことも多くあると思います。しかし、そこで諦めてしまうのではなく、周りの先生方や保護者の方々と協力し合いながら、解決策を「考え続けていく」ことが大切なのだろうと、私は考えています。また、子どもたちと接するにあたり、自分の中の引き出しは多くあればあるほど、良いです。なので、大学では勉強だけでなく、サークルやボランティア、遊びなど、この期間にしかできない様々な経験をして、自分の考えや知見を深め、広げていけていくことも大切だと思います。最後の学生生活、ぜひ目一杯楽しんで下さい。

児童心理教育専修4年C. H. (4月より千葉県内で公立小学校教員)